環境事始　二十四帖　東北の関門信夫山戦記

～ 孫子曰く「算多きは勝ち算少なきは負ける」～

加藤 龍夫著

一通の手紙を受け取った。松枯れの農薬空中散布皆んなで反対するが役所では聞く耳持たず埒が明かないで困っている、助けて欲しいとの文面、差出し人は境野米子さん。救援に行くのはよいがまたお婆さんかと直ぐに東北新幹線で福島に向かった。驛に着くとこの日は歩行者天国で道路脇に七夕の竹を並べ短冊に空散反対とスローガンが書いてあり、道路の真ん中に女の人がオルガンを弾いている。ビラを配っている奥さんに大将はと訊ねて米子さんに会って驚いた。なんか洒落た出で立ちの若い美人だった。名前はヨネコでなくてコメコという、終戦の時に生まれて親がこの子には食料不足の苦労をさせたくないと米子と名付けたそうだ。早速作戦会議して調査の手筈を決めた。先生たちの戦略と戦力、宣伝も請願もいいけれど、毒物調査によって一発で決める。信夫山散布の日からスミチオン濃度の時間変化と濃度分布を調べる。勿論 NHK に報道させる。時間変化は山の中腹電源の取れる場所で試料自動採取機を設置、分布は福島市内八キロまで人数を繰り出して空気を集めるとした。朝ヘリコプターが飛来して散布を始める。その下での作業は危険だが住民は曝されているのだし已むを得ない。結果は予測通り、一時間ごとに採取した大気中濃度は散布直後から検出し、散布終了後も濃度は上昇し続け２時から３時に最高となり、夕暮れから夜間に減少、さらに翌日気温とともに再び上昇し日中最高、そして夜間減少して、これを繰返した。日とともに漸次減少はしたが、一週間まで測定してこの傾向は変わらなかった。さらに続けたらまだ汚染は測定されたはず。これは何のことかと言えば、一旦撒かれた農薬は草木や土に付着し、そこから蒸発して大気汚染となる。だから農薬が付いている限り昼間気温の上昇とともに汚染が酷くなり、夜間気温の低下とともに汚染が下がるわけ。現に朝散布中より散布の何時間後のほうが濃度が高くなっている。勿論こんな理屈論文に幾ら書いても汚染の停止にはならない。この汚染が上下する状況をテレビで逐一放映したものだから役所も降参して以後空中散布は中止となった。一方分布調査の方は市内全域に拡散していると判明した。また花井が「証明されたから三日もやればいいのでは」と進言したが先生は「いや最低一週間必要だ、これは戦争で敵対勢力があるのだから、完膚なきようしなければいけない」と教えた。それに日本の気象はまず一週間あれば一巡して異論を唱える隙を与えない理由もある。こういう場数を踏んで先生は思う。環境を守る運動正義だけでは効率が悪い。多くあちこちで勝つべき戦争に負けてもいる。相手よりも利口であることを原則忘れてはいけないのだ。何と申して敵より勝れた道具を持つこと、絶対不敗の戦略を立てること。先生は前の大戦の理不尽を体験した世代、だから何ごとにも勝ち負け、生き死にを考える習性が身に着いている。因果だけれど今更仕方あるまい。米子さんは以来友人で退官記念には司会をお願いしたけれど、生涯お会いした女傑の一人

である。目下福島の隣町で旧い庄屋の藁屋根を建て直して風雅な生活を実行している。それはやりたい気はあってもとても真似できる勇気はない。先生は何とか五千円の家賃で、田舎住まいをするのが精一杯というところ。しかし相談した訳ではない、空中散布を断固反対する行動と藁屋根旧家に住みたいとする趣味とはどこかで一致するのだろうか。